

現今大学生の学習意欲に関する一考察（１）

吉 岡 剛

はじめに

アジア地域からの留学生が日本の大学で驚くことの一つは、授業中の私語だそうである。それは、欧米からの留学生が、日本の大学生の学費が大半親から出ていることに驚くのと共に、確かに、我国大学生の或特徴を示しているのかもしれない。

特に、私語については、時々、新聞の投書欄に、日本人学生から、留学生の真面目さと比較して、自覚や自粛を求める自浄の声が見られるほか、大学教員から、嘆きと、大学教育を問う悩みがもらされることがある。教員間でも、今や、二人寄ると、話題が授業中の私語に及び、学生の学習意欲の低下を批判することが多いといわれている。実は、私語は教員には、自分の恥を語ることと同一であって、自分の講義内容の魅力の無さ、授業技術の劣悪さ、ひいては、学生からの人気のなさを表わすものとして、従来は公表が忌避されるものに他ならなかった。

しかし、最近、状況は変化してきた。こだわらずともよい程に私語が一般化してきて、自分一人の問題ではなく、全体の問題となり、且つまた、学生の問題でもあると感じられるようになったからである。勿論、私語の理由乃至は責任の所在については、更に考察されねばならないが、今年７月、NHK教育テレビの『コラム』で、児玉邦二武蔵野女子大学教授により、「大学生の私語」として、正面から取り上げられることとなった。

児玉はそこで、私語の起こる理由を、①一方通行の講義、②入試歴社会、③群れたがる習性、④退屈な講義画面、という形で取り上げたが、更に加えて、学生達のダブル・スクール現象、サークル活動、アルバイト等による忙しさ、従って、友人との対話機会・時間の減少を同情的に言及した。又、結論的に、これへの教師の応じ方として、①講義を魅力的にする、②時々叱って注意する、を挙げたが、この論は果して当を得ているのかどうか、単なるコラムでの取り上げを越えて、更に追求されねばならないところであろう。

なお、同じ７月、朝日新聞朝刊の人物欄『ひと』で、亜細亜大学の衛藤藩吉学長が、「留学生や勉強好きの学生から」「直訴を受けて、『私語追放運動』の通達を学内に出し」「それでもやめない学生には、教授会で処分」することを決定したことが紹介された。学内には「小学校じゃあるまいし」という批判もあったが、衛藤自身「私語のすごさは体験ずみ」だったという。

この運動に対して、同記事は、更に「ほかの教育現場から共感が多く寄せられ」、わざわざ

訪ねてきた、殆ど匙を投げていた短期大学教授、クラスを小人数化しても効果なしと電話してきた高校教員がいたとしている。衛藤自身は「この忙しい時代に、90分じっと座っておれ、というのが無理かもしれない」と、「十年一日のようなノートの棒読み、講演口調」の講義をしないよう教員に求めたという。この記事が衛藤の考えを忠実に伝えているかどうかはともかく、ここにも更に検討しなければならない問題が潜んでいる。

後述するように、筆者は、これら学生の学習意欲を巡って、実態を把握し、要因を分析すべく、三種のアンケートを作成、それぞれ三種の対象に回答を依頼したが、それに応じた或大学の教授から、既にその大学の、特に教養課程担当教員間で¹⁾1988年に行なった調査結果（回答者81名＝常勤53名、非常勤28名、回収率64.5%）を参考に提供された。

そのなかの「教務上の困難点」によると、「学生の受講態度」として、私語が21件の他、居眠り6、他教科の予習9、欠席・遅刻15、無気力26、低学力15、が報告されている。恐らくこれは、日本の大多数の一般大学で大同小異の状況として受け取られるものであろう。この、或は学外秘としたい程の資料が暗示する各大学の実態はどうであるのか、より詳しい考察が加えられる必要がある。なお、この報告の文章回答中から若干を選んで再録しておきたい。

「授業中の雑談が多い。私語というものではなく、数人が前後左右でしゃべり続ける。本年度は毎週注意した。眠る学生が毎回数人、語学の予習をする者が3分の1程度いる。授業に本当に参加できているのは20%、予告なしの小テストをしばしば実施したが、教室に体を運ぶだけで安心している学生の実態がその結果に表われている。」

「私語をやめさせる為にかなりのエネルギーを費やす。近頃は少しでも私語があれば講義を中断し、静かになるまで再開しない。目に余る者は退席させる。但し、静粛は保てても、学生が講義に耳を傾けているかは疑問。」

「無気力、お喋り、予習、居眠りが目に余る。大学は僅かばかりの専門知識・技能と、それを帳消しにして余りある悪徳を身につける場となっている。」

1. 私語をめぐって

私語は、昭和40年代初めには、既に私立の女子短期大学で一般に見られるものとして問題視され始めていた。短期大学は、国公立・男女共学を含めて、昭和37年に300大学（学生数93,361名）の大台に乗り、以後急増して、僅か4年後の41年に413大学（学生数194,997名）を数えるに至っていたが、その内女子が²⁾77.8%を占めることで、私語は半ば当然と受け取られていた嫌いがある。

勿論、私語を女子の特性と見ることには問題があるが、歴史的・社会的通念から、所謂「女子学生亡国論」³⁾のような偏見が、体験的には承認されていたのである。只、一面で、女子学生の生真面目さや礼儀作法が、高等教育機会の享受による社会的成熟と共に、やがて私語を解消させるものとも期待されていたといつてよい。

しかし、やがて40年代半ばになると、私語が4年制大学や、男子のものともなり、偏見が明確になると共に、前述の期待が空しいものとなったのである。原因は、急速な大学進学率の向上による大学のマス・プロ化、大衆化を否定できないが、他方で、昭和43年以後の大学紛争を通して、大学及び大学教員の権威が下降したことによることが大きい。又、戦後生まれの青年達の世相的なモノ・セックス化の傾向なども無視できないだろう。それでも、当初は、私語する者の比率は少なく、自覚による自浄作用も見られ、例えば、座席の取り方で、友人から独立するよう勧めると、それに応じる学生が殆どであった。

一方、大学での「居眠り」は、生理的現象として、元から有りえたとし、後に続く授業の予習など「内職」する者も無しではなかった。そして、仮にそれを不快に思う教員がいたとしても、他の学生には迷惑にはならなかった。又、「遅刻」「途中退出」は他へ影響する点で問題ではあったが、前者はともかく、後者は、礼儀上の自覚から、元々多いものではなかったと言える。まさかの場合は、前述の内職で時間を埋められたからである。

ところが、昭和39年のオリンピック東京大会や45年の大阪万国博覧会の開催が象徴する経済的好況、従って、アルバイト口の容易な獲得と生活上の余裕から、娯楽費捻出のアルバイト収入が期待されるにつれ、また、サークル活動が盛んになるにつれ、時間のロスへの焦りが途中退出の非礼意識を凌駕するようになったと思われる。そして、学生の学習姿勢に大きな変化が見られるようになった。

この変化は、一方で、小学校・中学校・高等学校でも目立つようになり、第二次ベビー・ブームの子ども達が多量に就学し始めた50年代以降は、プレハブ校舎の大規模校やすしづめ教室、そして、進学塾の増加など、子どもを巡る教育条件の乱れが、他の種々の要因を含んで、学校現場に問題を生んだのである。しかも、やがて、その全体への比率や絶対件数は少ないにしても、一時期の教育界を甚だしく暗くした校内暴力の続発である。その中に身を置いた少年少女達が、今丁度、大学生として在籍していることになる。

ところで、私語は、例えば、まず大学間に隔差があることは容易に推測できる。国立大学を定年で退職した教授が、赴任した私立大学に幻滅して、早々に退く例は決して少なくないという。実は当人も、非常勤出講時には私語を気にしないよう努めていたのであるが……。勿論、国立大学の恵まれた条件の中でも、全く私語がないわけではなく、また逆に、私立大学のすべてで私語が多いわけでもない。又、その程度は大いに異なる。

専攻間隔差の方はどうであろうか？ 文系に比して、理系では、実験実習が多く、私語は必要な打ち合わせとして、極端にならない以上、問題視されていない。又、基礎的積み重ねの重要性や、提出物（レポート）の回数も多いことから、半ば強制的に学習意欲の持続を喚起させられていると言ってよい。それでも、東北大学の西沢潤一教授が『中央公論』の「科学者のロマン」⁶⁾で書くところによれば、大学院の学生ですら、私語はともかく、昔日の院生の意欲や行動性には欠けると言う。

では、講義が、一般教養であるか、専門科目、その他の課程であるかではどうであろう？ 一般に、教養課程担当者の学生批判は大きい。先の某大学の調査も、実施の動機はそこにあったと思われる。理由の幾つかは、大規模・多人数学生へのマイク授業や、必ずしも当を得てはいないが、学生の「高校の焼き直し」という捉え方など、既に周知のことといってよい。只、旧帝国大学系の或教授によれば、規模の大きい（私立大学程ではないだろうが）一般教養の授業であろうとも、私語はないという。彼の、「授業を私語せずに聴けるかどうか、この大学に合格するかどうかの一つの決め手になっているのだろう」は、当を得ているのだろうか？

必修科目と選択科目乃至は免許等の必修教科に関してはどうであろうか？ 授業の種類としての、実験・実習・実技・ゼミ、講読、講義の中では、学生がどうしても受動的となる「講義」が、私語の可能性を最も多く持つものと思われるが、どのような場合に多いのか？

いずれにしろ、問題実態をつかみ、要因を分析し、それに従って、どう問題を解決していくべきか？ 又、いけるのか？ を検討する必要がある。

2. 学習意欲低下の要因仮説

大学生の学習意欲が減退した理由として、次の様な幾つかの仮説を立てることができる。

- ① 大学の大衆化……当該年齢の35%強の大学進学は、高校までの成績順で上から3分の1迄であればともかく、実際には、分布幅はもっと広いことから、学習への資質が伴わない者の在籍も見られるようになっている。しかも、元々目的意識がなく、従って、初めから学習意欲の少ない者も在学することになった。一方、大学という機関は、多数の進学によって、羨望すべき、誇りの持てる対象である度合いを少なくしている。
- ② 偏差値重視・管理主義の教育……小学校からの受験向き知識暗記主義教育に、塾での強化教育が重なって、学力観や人格観に歪みが生じ、多くの者に自信を失わせることとなっている。しかも一方で、受動的となり、自発性・主体性を欠くようになった。殊に所謂受験勉強の反動として、学習の意義や目標に就いての喪失状態が生まれている。又、家庭教育での過干渉や高校迄の厳しい校則による管理主義教育の為、自立心や自律性が育たず、思考・行動が全体に幼児化している。
- ③ 社会における経済の主導性……経済的要謂による役に立つ人づくり政策の為、学習価値観が、社会的成功、特に物質や金銭についての有効性如何に偏り過ぎ、大学の存在理由である理念的部分や、学習の人格的把握が、実用的知識・技術より過小評価されるようになった。しかも、例えば、学習の主たる目的が、大学の学習成果・実績の高低よりも、就職の為の形式的資格の取得にあると考えられるようになった。そして、古き良き時代の教養主義は否定されている。
- ④ 「努力」に対する評価の低下……豊かさの中で、家庭に於いても過保護下にあり、緊迫した困苦の実際体験が、学校生活の内外で少なくなった為、努力することの必要認識が薄れ、意

欲の有無が問題ではなくなった。殊に、社会に出る場合も、仮りにフリー・アルバイターであれば、履歴に不安や不利を見る度合が少なくなり、寧ろ、全体として、旧来の規範から自由であることの価値観が高まっている。

⑤ 大学側対応の遅れ……大学の社会的權威の低下や若者の大学観の変化に、大学及び大学教員が追い付けず、考え方・行動の仕方に断絶があり、学生の潜在的な学習意欲を喚起する教授法の開発・実施にも欠けている。しかも、大衆大学による教員数の需要からきた教員団の質的低下を否定できない。

⑥ 大人による社会倫理教育の失敗……適切な倫理観の養成は勿論、日常生活上、社会秩序への道徳的あり方を充分教育せずにここに来た。自己と社会を、生き方の問題として対決させぬ儘、従って、罪悪感の様なものへの感性を鈍らせた為、若者は教育を受ける者としての社会的自覚を持たなくなっている。

⑦ マス・メディアの発達による学校外社会の誘引力……テレビ画面の目まぐるしい動きで象徴される社会現象の非常な変化の中で、古典と関係するような読書の価値は無視され、映像、例えば、漫画に代表される簡単安易で短い間合いのものが持つ魅力に、学校機関の教育力が大幅に乗り越えられている。

⑧ 校内暴力による学習習慣の欠落……校内暴力の当事者ではないにしても、在学中、校内乃至は他校で暴力行為が見られ、それにより、教員の学習指導が適切さを欠いたり、充分でなかった為、学習習慣が身に付かず、自分で学習方法を開発することもなく、今日に至っている。

以上は、予測される学習意欲低下の仮説として試みた素描に過ぎない。これらに就いて、明確な根拠になるものを提示できるかどうか、それが、本論の中心課題になる。これらの予測が分析的にも正しければ、他に留意すべきものを加えて、対処の方法が見付け出されるだろう。

3. これまでに見られる研究業績

これ迄のところ、大学生の学習意欲の実態については、調査研究が部分的にはともかく⁷⁾、殆どなされていないと言ってよい。又、学生の学習意欲に繋る大学教授法の研究も、我国では、そう多いものとは言えず、主として、欧米等の理論と実践の翻訳紹介⁸⁾が行なわれるに留まっている。しかも、多くは、一般に日本の大学教員からみて、欧米の研究と実践の丹念さには驚きこそすれ、部分的以上に活用を誘われるものではない。それは、是非は別として、授業への両者の基本的姿勢の違いと、改善の必要感の差に由来するものであろう。そこでの提言の多くは「高校ではあるまいし」といった感想を持たせる至極尤もな詳細に互る授業技術なのである。

従って、広島大学の喜多村和之教授及び東京工業大学の坂元昂教授等による研究は、日本のより実態に触れた数少ない手がかりを提供するものと言することができる。例えば、喜多村編『大学教育とは何か』⁹⁾の中で、坂元は「大学生における学習技能と学習意欲」と題して、自ら作成に参加した ①よい講義の要因判定資料としての「講義の評価表20項目」(「線結び式講義

診断法」を含む）と、②「講義改善視点表」を紹介しているが、これらは、講義する側に自己省察の要点を示すものと言ってよい。

但し、これは、あく迄教員側からの授業への戦略的な提起であり、学生の学習意欲の実態を把握したものではない。寧ろそれら意欲の実態は、研究書乃至は研究論文においてではなく、エッセイ乃至は評論風の叙述の中で、「学生気質」の変化として語られるに過ぎない¹⁰⁾と言うべきだろう。

ところで、坂元の「学習意欲の調査」は、例えば、「難しい問題にファイトが湧き、挑戦する」「失敗した時、原因を突き止めようとする」「意見がある時は、進んで発言する」のような項目30に対して、5段階の自己評価を加えさせるものであり、うち10項目を今回の調査項目として活用させてもらっている。坂元はこれに併せて「学習技能の調査」及び「創造性調査」を行ない、学習意欲の構成を「認識への追求」「社会的積極性」「自己管理」の三因子で整理した。そして、「学力に対する学習意欲の寄与」「学習意欲と学習技能の関係」「創造性と学習意欲の関係」等を報告している。その結果は、実際の学業成績と関連させられているので、学習意欲の構造を見得る注目すべき研究になっているが、学生の実態を総体的に捕えたものではない。

なお、筆者の、本論に先立つ「大学」研究としては、昭和37年の大学通信教育卒業生の実態調査以来、二・三発表してきたが、昭和62年の、本学『人文学論集』第21号に「通信課程導入による大学改革案——特に入試との関係で——」と題するものを纏めた。これを簡単に要約することは、誤解を招きかねないが、これは、学習効果の基盤に、学習意欲を無視できぬことから、学習意欲に欠ける進学者を結果的に制限しようとする厳しい提言となっている。つまり、教養課程単位を、自主自律が絶対条件である通信教育形態で履修させることで自然淘汰し、種々の意味でロスを少なくしようとするものである。先に引用した某大学の教授達の叙述に見るように、安易に身を置くことのできる大学機関があるが為にスポイルされる若者もいよう。逆に、学習意欲がありながら、経済的・時間的・年齢的に通学不能の者もいるわけで、その者達に、専門課程の通学のみで所期の目的を果させる機会を、それは与える。しかも、一・二年生の不在による収容力の余裕で、入学者をほぼ倍増させられるのである。

勿論、現実の通信生がすべて意欲旺盛とは言えないし、又、その受講意欲が、より明確な資格・免許の取得によるとしても、本学通信教育生の状況から見れば、学習意欲のない者は去らざるをえない学習過程をそこに見ることができる。又、社会人として活動しながら、目的意識をもって、学費を自分で捻出し、時間を作って学ぶ課程は、トロウの言う、今後のユニバーサル・アクセス・大学¹¹⁾に発展するであろう学習社会に、まさに主流となるべきものと考えられるのである。

4. アンケート¹²⁾について

I. 種類及び対象

①「動機づけに関するアンケート」

A大学（普通の私立大学），一般学生，1～3年，507名（男274名，女233名）

B大学（所謂「関関同立」中の一つ），教職課程受講生，2年～大学院生，96名（男55名，女41名）

C大学（県立短期大学），回答者は女子のみ，117名

②「学生の学習意欲に関するアンケート」

国・公・私立中学校教員，100名

同・高等学校教員，100名

③「大学生の学習態度に関するアンケート」

国・公・私立大学教員，234名，（国立52，公立17，私立165）

同・短期大学教員，66名，（国立8，公立13，私立45）

大学教員，計 300名

なお，②③の対象については，全国から地域及び学校段階を考慮しつつ，可能な限り偏らないよう選択した。

II. 実施年月及び方法

1989（平成元）年，2月～3月。

①AB大学については直接回収，①C大学については，当該大学教員に実施依頼。

②③については，郵送回収。

III. 回収数及び回収率

① 721，なお，全回収とする。

② 中学校教員…62……62%

高校教員……48……48%

計……………110……55%

③ 国立大教員…22……42.3%

公立大教員…8……47.1%

国公立計……30……43.5%

私立大教員…75……45.5%

大学計……105……44.9%

国公立短大…10……50.0%

私立短大……14……31.1%

短大計……………24……36.4%

IV. アンケート法による研究の問題点

当然のこと乍ら，アンケートは回答者の好意に依存したものである。従って，形式・内容のみならず，趣旨，回答者の状況如何で，回収率に異同があることは否定できない。今回②③の場合，回収率は決して良いものとは言えず，郵送回収分を対象別で見ると，最低31.1%から，良くて62.0%で終わっている。全体としても，依頼数500に対し，回答数は239，都合47.8%の回

収率で、残念にも50%を割っている。

なお、本年は、幼稚園教員を対象として、別主題・別形式のアンケート600通も依頼したが、回収されたのは僅か212通、回収率35.3%であり、それに比べると、良い方と言える。このアンケートへの回答が少ない理由は、回答を依頼された側からみて、次の様なことであろうと考えられる。

まず、今回は、アンケートの意図を「大学生の学習意欲の低下について」「一般的な状況を確認」する為であると明記したが、それは、次のような立場の教員には無回答という姿勢をとらせたのであろう。

- ① 必ずしも低下しているとは思わない。これは自然の動きであると思う。
- ② 確かに問題ではあるが、どうにもならないものとして諦めている。
- ③ 意欲の低下要因を検討するより、前向きに、教授する側のあり方をこそ研究すべきである。

又、④ 形式的に見て、アンケート項目が適切ではなく、選択肢の立て方も不適当で答えにくい。⑤ 多忙で、回答のための時間的余裕がない。⑥ アンケートは、ただ依頼してくるだけで、結果を報告してこないから、応じないことにしている。

こうした仮定に立てば、回答に応じた人々は、一般に、質問する側と問題意識が一致した場合に比較的多いということになる。その意味では、結果として描き出せる実態は、幾分割り引きして考えなければならない限界を持っていることになろう。この点、アンケートは、対象選択の方法を含めて、勿論絶対的ではなく、或程度の実情を示すに過ぎないことを再確認せねばならない。

なお、この意味で、無回答理由を確認できる「アンケートのアンケート」が必要であるとも言えよう。一方、回答意志がない場合は、アンケートに返信の便宜がはかられていれば、無回答理由を略記して、そのまま返送し、依頼者が改めて他機関に転用できるよう配慮することが礼儀であろう。統計処理の都合上、回答数が多いことが望ましいのであるから……。

5. 考察

(1) 実態整理及び診断

論の展開上、各アンケートの回答者及び対象について、資料としての信頼性と限界を確認しておきたい。

《1. 回答者の分析》

*大学教員について

- ・調査対象大学の選択において、短大、殊に私立短大の選択比が低い上、回答数も少なかった点に問題は残る。
- ・回答者は40歳代以上が82%を越え、かつ10年以上の教育経験者が80%強となっているので妥当であろう。

教育学部論集

表 1 - 1 勤務大学

設置者別	大 学			短期大学			合 計		
	実 数	依頼数	回答数	実 数	依頼数	回答数	実 数	依頼数	回答数
国 立	95	52	22	40	8	10	227	90	40
公 立	38	17	8	54	13				
私 立	357	165	75	477	45	14	834	210	89
計	490	234	105	571	66	24	1,061	300	129

(備考) 大学・短期大学実数は『全国学校総覧』89年版(原書房)による。

表 1 - 2 年齢

回答者年代	大 学			短大	計		総 計	
	国公立	私立	計	計	国公立	私立	回答数	%
60 歳 以 上	1	5	6	0	1	5	6	4.7
50 歳 代	9	23	32	10	14	28	42	32.6
40 歳 代	14	35	49	9	16	42	58	45.0
30 歳 代	5	8	13	5	8	10	18	14.0
29 歳 以 下	1	0	1	0	1	0	1	0.8
NA	0	4	4	0	0	4	4	3.0
計	30	75	105	24	40	89	129	100

表 1 - 3 教育経験年数

経験年数	国公立	私立	計	%
30年以上	3	3	6	4.7
20年台	12	28	40	31.0
10年台	16	42	58	45.0
5 年～9 年	7	11	18	14.0
4 年以下	2	1	3	2.3
NA	0	4	4	3.0
計	40	89	129	100

* 中学・高等学校教員について

表 2 - 1 勤務校校種

設置者別	中 学 校			高 等 学 校		
	実 数	依頼数	回答数	実 数	依頼数	回答数
国公立	11,265校	100人	62人	5,512校	100人	39人
私 立			0			9
計			62			48
依頼数計		200人	回答数計		110人, 55%	

(備考) 中学・高等学校実数は表 1 - 1 備考に同じ。

表 2-2 所在地

自治体規模	中 学 校	高等学校	計
政令指定都市	10	11	21
人口30万人以上	11	15	26
人口10万人以上	14	12	26
その他の市	13	4	17
郡	1	0	1
町	12	5	17
村	1	0	1
NA	0	1	1
計	62	48	110

表 2-3 生徒数

生徒総数	中 学 校	高等学校	計
1,000人以上	33	39	72
999人以下	28	9	37
NA	1	0	1
計	62	48	110

表 2-5 職名

職 名	中 学 校	高等学校	計
教 諭	12	17	29
教 頭	48	28	76
そ の 他	2	3	5
計	62	48	110

表 2-4 高等学校課程

課 程	校 数
普 通	42
商 業	9
家 庭	3
工 業	1
農 業	1
その他	1
計	57
併置校あり,実数より多い	

表 2-6 教育経験年数

経験年数	全
30年以上	57
25年以上	28
20年以上	13
15年以上	5
10年以上	4
5 年以上	3
計	110

表 2-7 担当科目

科目名	全
社 会	19
数 学	18
国 語	14
英 語	10
理 科	9
その他	10
NA	30
計	110

・中学校の全数11,265校, 高等学校の全数5,512校に対し, 各100校とした為, 高校の方が選択比は高い。

・高校の選択は, 基本的には, 各都道府県の全校数÷100×2とし, できるだけ郡部を含めたが, 学校段階の性質上郡部に少ない。但し, 回収率はほぼ等しい。

・中学校の選択は, 同じく全校数÷100としたが, 都道府県内の, 特に, 県庁所在地など主要都市を入れた為, 市部85対郡部15となった。郡部は1校以外全部回答があった。

・中・高共, 地域の人口割合からみて妥当であろう。学校規模(生徒数)は上記理由から, 大規模校に寄っており, 課程も, 農・工・関係に少なかったことを否めない。

- ・回答者は、教頭が受信・現場責任者として多く、従って、経験年数も高くなっている。担当教科は妥当であろう。

＊大学生

表 3 大学・専攻・性別 回答者数

名称	受講科目	学年	男子	女子	計
A大	一般教養(社会科学)科目	主に 1・2 年	172	80	252
	教育学科専門科目	主に 2 年	63	101	164
	教職課程科目	主に 2・3 年	35	38	73
	ゼミナール	3 年	4	14	18
	計		274	233	507
B大	教職課程科目	主に 2・3 年	55	41	96
大 学 計			329	274	603
C大	家政学系短期大学	1・2 年	0	117	117
総 計			329	391	720

- ・機会をみて、国立大学も若干対象化する必要がある。

表 4-1 判断対象学年

《 2. 判断対象学生の分析》

＊大学教員の回答から

対象学年	国公立	私立	計(件)
1 年	17	42	59
2 年	18	41	59
3 年	21	45	66
4 年	14	35	49
NA	6	5	11
計	75	168	243

(備考) 複数学年にまたがっているので回答者実数より多い

- ・ほぼ全学年が平均して考察されている。

表 4-2 入試倍率

入試倍率	国公立	私立	計(校)
10 倍 以上	2	21	23
7 倍 以上	3	6	9
5 倍 以上	13	19	32
3 倍 以上	18	15	33
以下	2	16	18
NA	2	12	14
計	40	89	129

表 4-3 入試難易度

入試難易度	国公立	私立	計(校)
非常に難しい	2	0	2
難しい	16	19	35
普 通	18	48	66
易しい	1	15	16
非常に易しい	0	0	0
NA	3	7	10
計	40	89	129

現今大学生の学習意欲に関する一考察（１）

- 比較的難しい大学の入学者について多くなっているが、実態は反映しているだろう。

表 4-4 対象学生数

対象学生数	国公立	私立	計(校)
800人以上	2	11	13
400人以上	3	18	21
200人以上	7	19	26
100人以上	10	24	34
99人以下	18	9	27
NA	0	8	8
計	40	89	129

表 4-5 対象学生所属学部・学科

学部・学科	回答数
文 学	(件) 30
教 育	13
経・商	11
理 工	11
家 政	10
社 会	10
法 律	8
外国語	5
保 育	5
体 育	4
医・薬・看護	3
教 養	2
NA	9
計	129

- 対象学生は母集団として妥当であろう。
 - * 中・高教員の回答から
- 都市部が多い為、進学率の高い学校の生徒達である。

表 5-1 大学進学希望者の割合
(高等学校)

割 合	回答数
80%以上	31
60%以上	4
40%以上	8
20%以上	2
以下	3
計	48

表 5-2 通塾者の割合

通塾割合	中学校	高等学校	計
80%以上	6	2	8
60%以上	26	3	29
40%以上	12	5	17
20%以上	13	9	22
10%以上	0	13	13
NA	5	16	21
計	62	48	110

- 高校で少ないが、無回答（NA）が多い為、断定はできない。但し、今日の一般的傾向を一応示しているといえるだろう。

《 3. 受講態度を巡って》

ア. 「学習意欲」

まず、本論の中心テーマである学習意欲の現状はどうであろうか？ 経時的な比較資料が充分無い為、今回の調査事実として捕える。

* 大学教員による判断（表 6）

*中・高教員による判断（表7-1，表7-2）

表6 大学生の学習意欲

	大 学						短 期 大 学						計					
	国公立			私 立			国公立			私 立			国公立			私 立		
	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%
	1	2	3.3	1	1.3	19	25.3	30	28.6	2	1.9	0	0	0	0	1	2.5	1.6
学習意欲の有無	11	36.7		19	25.3	30	28.6	6	60.0	5	35.7	11	45.8	17	42.5	24	27.0	31.8
全員に有る	9	30.0		19	25.3	28	26.7	2	20.0	3	21.4	5	20.8	11	27.5	22	24.7	25.6
3分の2に有る	5	16.7		24	32.0	29	27.6	2	20.0	4	28.6	6	25.0	7	17.5	28	31.5	27.1
半分に有る	3	10.0		6	8.0	9	8.6	0	0	2	14.3	2	8.3	3	7.5	8	8.9	9.3
3分の1に有る	1	3.3		6	8.0	7	6.7	0	0	0	0	0	0	1	2.5	6	6.7	5.4
その他																		
NA																		
計	30	100		75	100	105	100	10	100	14	100	24	100	40	100	89	100	100

（備考 %は四捨五入の結果，必ずしも合計が100にはならない場合もある。）

表7-1 中・高生の学習意欲（付・大学生の学習意欲）

	中 学 校			高 等 学 校			計			大 学		
	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%
	7	11.3		11	22.9		18	16.4		2	1.6	
	26	41.9		21	43.8		47	42.7		41	31.8	
学習意欲の有無	17	27.4		10	20.8		27	24.5		33	25.6	
全員に有る	7	11.3		5	10.4		12	10.9		35	27.1	
3分の2に有る	2	3.2		1	2.1		3	2.7		12	9.3	
半分に有る	3	4.8		0	0		3	2.7		7	5.4	
3分の1に有る												
その他												
NA												
計	62	100		48	100		110	100		129	100	

表7-2 中・高，教室の雰囲気

	中 学 校		高 等 学 校		計	
	回答数		回答数		回答数	
	4	6.5	5	10.4	9	8.2
	20	32.3	19	39.6	39	35.5
教室の状況	25	40.3	20	41.7	45	40.9
熱 心	12	19.4	4	8.3	16	14.5
真面目	1	1.6	0	0	1	0.9
静 か	0	0	0	0	0	0
沈 滞						
騒がしい						
NA						
計	62	100	48	100	110	100

- ・大学と短大の比較では、短大の方が「学習意欲 3 分の 2 以上」が多い。
- ・国立対私立では、国立に「3 分の 2 以上」が多く、「3 分の 1 以下」が少ない。
- ・大学と中・高を比較すると、「3 分の 2 以上」が、中・高、特に高校に多い。
- ・大学の場合、全体として「3 分の 2 以上」は 3 分の 1 のみ。「半分以下」が 52.7% となる。これは教員側の主観的判断とはいえ、大学教育という場で無視できない大きさである。
- ・なお、「半分以下」が中学で 38.7%、高校で 31.2% であることも勿論留意すべきであろう。教室の雰囲気もほぼそれに応じている。

＊大学生自身の判断（表 8）

学生への質問は、当然乍ら教員対象の場合と異なるので直接対比はできないが、学生の自己評価を通して或程度の考察は可能である。

・A・B・C 各大学の対象人数に差がある為、各大学内平均比率を示すに留め、全大学合計及び男女別合計などは行なわない。又、複数回答である為、順位と 30% 以上の回答が集まった項目を重視すると、大学間隔差・男女間隔差はあるが「試験前や課題提出時のみ勉強」が圧倒的に多く、すべて 1 位であり、59.4%～88.9% の間で自主的な学習意欲の弱さを示す。しかも「高校より勉強せず」が 43.8%～77.8% と多く、勉強の内容にも依ろうが、学習意欲の不充分さが明確である。勿論、逆に取れば、高校と同等乃至は「高校以上に勉強」している者が約 20%～55% いることにはなるが、クロス集計は後日に期したい。なお、「親への感謝」の姿勢は無視できぬ意味があり、「方法を工夫しての実行」も積極性として評価できるが、「目的意識あり」は、学習意欲に関して重要であるだけに矢張り少ない。又、選択肢中最も「学習意欲」を表わす項目と考えられる「ファイト・挑戦」及び「疑問点の徹底的追求」はそれぞれ少な過ぎる。

イ.「進学理由」

学習意欲を最も強く裏付けるのは進学動機乃至は理由である。

＊大学生の回答から（表 9）

- ・さすがに「親の勧め」や「友人が行く」は少ないが、「高卒の不安」は無視できぬ程多い。又、「資格」と「就職有利」が比較的高いが、「勉強したい」が B 大を除いて低く、「実力を付ける」も少ない。そして、僅かに「教養の必要」が 4 分の 1 の学生によって期されているだけである。
- ・男女間の差では、A 大の女子の「資格」要求の高さが目立つ。「就職」については A 大の男子、C 大（女子）が比較的多い。なお、「進学動機」には、表 9 に併記したような別資料があるので比較できる。勿論調査法等の違いから、単純に結論は出せないが、これと比べても B 大の「勉強したい」は注目できる程高く、又、女子の「資格」要求が B 大女子を別として等しく大きいことがわかる。
- ・なお、4 年前のリクルート調査では「教養」の価値割合が殆ど倍と高いが、今日はそれが変

表 8 大学生の学習姿勢（自己評価）

順位	選 択 肢	A 大 学						B 大 学						C短期大学	
		男 子		女 子		全		男 子		女 子		全		女 子	
		順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%
1	試験前や課題が出た時に勉強する。	1	69.3	1	64.4	1	67.0	1	56.4	1	63.4	1	59.4	1	88.9
2	高校ほど勉強しなくなった。	2	68.2	2	52.4	2	60.9	4	43.6	4	43.9	4	43.8	2	77.8
3	進学させてくれた親に感謝しながら勉強している。	3	40.1	3	39.5	3	39.8	2	47.3	2	58.5	2	52.1	4	20.5
4	すべきことは、うまく実行できるよう方法を考えてやる。 ※	4	33.6	4	37.3	4	35.3	2	47.3	3	46.3	3	46.9	3	34.2
5	目的意識をもって勉強している。 ※	5	31.4	5	30.9	5	31.1	6	34.5	5	41.5	5	37.5	6	12.8
6	失敗した原因を突き止めようとする。 ※	6	23.0	6	16.7	6	20.1	7	25.5	13	9.8	9	18.8	8	8.5
7	大学で学ぶ者は卒業後社会にそれを還元する義務があると思っている。	6	23.0	8	15.0	7	19.3	8	23.6	6	24.4	7	24.0	10	5.1
8	能率が上がるよう時々勉強の仕方を変えてみる。 ※	8	19.0	10	12.9	8	16.2	11	14.5	14	7.3	11	11.5	5	17.1
9	疑問点は徹底して追及する。 ※	9	14.2	7	15.5	9	14.8	5	36.4	6	24.4	6	31.3	13	3.4
10	自分の立てた勉強の計画は出来るだけ実行している。 ※	11	11.3	9	14.6	10	12.8	10	20.0	8	17.1	9	18.8	7	12.0
11	高校までと变りなく普通に勉強している。	10	11.7	12	9.9	11	10.8	8	23.6	8	17.1	8	20.8	10	5.1
12	学期始めなど生活や勉強の計画表を立てる。 ※	13	8.8	10	12.9	12	10.7	13	7.3	10	14.6	12	10.4	13	3.4
13	難しい問題にはファイトが湧き、挑戦する。 ※	13	8.8	13	9.0	13	8.9	13	7.3	14	7.3	15	7.3	10	5.1
14	グループ活動では自分が率先してやる。 ※	12	9.9	15	5.6	15	7.9	15	3.6	10	14.6	14	8.3	9	7.7
15	意見があるときは進んで発言する。 ※	13	8.8	14	7.3	14	8.1	12	9.0	12	12.2	12	10.4	13	3.4

（備考） 1. 複数回答である。

2. ※印は前述の坂元等の調査項目を借用した。

化したと言ふべきなのか？ 同様
「実力」が３倍以上の違いで、今
日減少したことになる。この理由
と意味は何であろうか？

表 9 大学生による大学進学理由（付・他機関調査）

順位	選 択 肢	A 大 学						B 大 学						C短期大学						日本リクルート進学動機調査(1984)					
		男 子		女 子		全		男 子		女 子		全		女 子		短大志願女子		大学志願女子		短大志願女子		大学志願男子		大学志願男子	
		順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%
1	資格の必要性	1	27.7	1	50.6	1	38.3	1	34.5	2	29.3	2	32.3	1	28.2	1	53.8	2	52.1	2	53.8	3	26.6	3	26.6
2	教養の必要	2	25.2	3	27.0	2	26.0	3	30.9	3	24.4	3	28.1	3	24.8	2	46.7	1	57.0	1	46.7	1	44.5	1	44.5
3	高校卒で社会人になるのは不安	3	24.1	2	28.3	2	26.0	3	30.9	4	14.6	4	24.0	4	23.9	3	36.8	4	25.0	4	36.8	5	24.4	5	24.4
4	就職に有利	4	23.0	6	7.7	4	16.0	5	14.5	5	12.2	5	13.5	2	27.4	5	16.5	6	7.9	6	16.5	4	25.0	4	25.0
5	勉強がしなかった	7	5.8	4	15.9	6	10.5	2	36.4	1	41.5	1	38.5	6	7.7	7	3.3	5	15.1	7	3.3	6	11.4	6	11.4
6	実力を身につける	6	9.5	5	13.3	5	11.2	6	7.3	8	4.9	6	6.3	8	4.3	4	36.2	3	36.5	3	36.2	2	37.6	2	37.6
7	親が勧めた	7	5.8	7	6.0	8	5.9	7	5.5	7	7.3	7	6.3	5	8.5	6	4.3	7	3.6	5	4.3	7	2.5	7	2.5
8	友達が行く	9	2.9	9	1.3	9	2.2	8	3.6	8	4.9	9	4.2	8	4.3	8	1.6	8	1.3	8	1.6	8	2.2	8	2.2
9	その他	5	12.4	8	5.6	7	9.3	9	0	5	12.2	8	5.2	6	7.7										

（備考） 1. 複数回答である。

2. リクルート調査の出典は註(12)。なお、「人格形成」「学生生活や課外活動を楽しむ」「就職に必要な勉強」の選択項目が他にある。

*中・高教員の判断から

表10 中・高生の大学進学希望内容

順位	選 択 肢	中 学 校			高等学校			計		
		順位	回答数	%	順位	回答数	%	順位	回答数	%
1	就職に有利。	1	16	25.8	1	30	62.5	1	46	41.8
2	将来の生き方を考えると、大学を出ておく必要がある。	2	12	19.4	4	24	50.0	2	36	32.7
3	実力(知識・技術)を身に着ける。	3	8	12.9	2	27	56.3	3	35	31.8
4	資格をとりたい。	5	7	11.3	3	25	52.1	4	32	29.1
5	親が勧める。	5	7	11.3	5	21	43.8	5	28	25.5
6	興味・関心のある部門の専門性を深める。	5	7	11.3	6	20	41.7	6	27	24.5
7	教養を身に着ける。	5	7	11.3	7	17	35.4	7	24	21.8
8	高校卒で社会に出るのは不安。	9	6	9.7	7	17	35.4	8	23	20.9
9	大学在学中に将来を考える。	3	8	12.9	10	13	27.1	9	21	19.1
10	自分の生活を充実させる。	9	6	9.7	11	12	25.0	10	18	16.4
11	もっと勉強したい。	13	3	4.8	9	14	29.2	11	17	15.5
12	友人が行く。	11	5	8.1	13	11	22.9	12	16	14.5
13	開放感や自由を味わいたい。	12	4	6.5	11	12	25.0	12	16	14.5
14	クラブ活動や好きなスポーツを楽しむ。	14	1	1.6	14	7	14.6	14	8	7.3
15	高校までとは違う友人を大勢持つ。	14	1	1.6	15	5	10.4	15	6	5.5
16	アルバイトや海外旅行を体験する。	14	1	1.6	16	1	2.1	16	2	1.8
17	スポーツ選手として世に出る準備をする。	14	1	1.6	18	0	0	17	1	0.9
18	ボランティア活動などに参加して社会に貢献する。	18	0	0	18	0	0	19	0	0
19	その他	18	0	0	16	1	2.1	17	1	0.9
	NA		38			0	0			

(備考) 複数回答である。

・高校教員が当事者として直接関わっている為回答率が高い。高校教員によると「就職」が圧倒的に多く、「将来の為」「実力」「資格」がそれに続く。「実力」については、表9と比べて差が著しく大きい。それは何を意味するのか？ なお、「専門性」と「教養」が中位を占め、「自分の生活の充実」「もっと学びたい」は低い。「将来の為」と「高卒不安」は表裏をなすものとして、表9の大学生の場合に通じるのであろう。高校期は「親の勧め」が無視できない程大きい。大学生として振り返ると小さくなっている。

ウ.「受講状況」

a. 出席率

学習意欲と直結するものではないが、出席率は学習との結び付きを示すものとして重要である。一時は、講義への欠席が、主体性の証のように考えられた時代もあったから、逆に出席率の高さを皮肉の場合もあるが、ここでは素直に出席をあるべき姿として受け取ろう。

＊大学生の回答から

・「欠席なし」は19.7％～37.8％の間を示し、女子の方がかなり高い。

・なお、表11-1は、出席率だけでなく、授業に伴なう各種質問も併記したので、若干留意点を挙げると、「90分が長い」と感じる者が著しく多いが、これは、後の「雑談」の立派な要因となりうる。又、「睡魔に襲われる」が非常に多く、これに「雑談」を加えると、学習意欲と関わる問題が明確になってくる。特に「雑談」が短大及び男子学生に多いことが注目される。なお、「ノート取り」は、女子が男子に比べ、隔段に熱心で、2倍に及ぶ。熱心な受講は「有用な科目・資格に関する科目」であり、これは先の進学理由とも重なると言ってよい。

・問題と言うべき「集中できぬ」「やる気なし」がB大を除いて多いことは、出席はすれど、授業に参加していないことを示し、「雑談」「睡魔」「90分」に大きく影響していると言えるだろう。

表11-1 講義受講状況（自己評価）

順位	選 択 肢	A 大 学						B 大 学						C短期大学						A B 大 学					
		男 子		女 子		全		男 子		女 子		全		女 子		女 子		男 子		男 子		女 子		女 子	
		順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%
1	授業中睡魔に襲われることが多い。 1 講時90分を長く感じる。 役に立つ内容や資格関係の講義は熱心に聴く。 授業中雑談することが多い。 欠席は殆どしない。 ノートをよく取る。 講義に集中できない。 やる気がなくて困っている。 遅刻早退は殆どしない。 講義は考えながら聴いている。 演習や講読の時間は熱心に出席する。 休講が多いと不満である。	1	46.0	1	49.8	1	47.7	2	36.4	2	43.9	2	39.6	9	19.7	2	41.2	1	46.9						
2		2	43.8	3	38.6	2	41.4	2	36.4	6	22.0	3	30.2	1	65.0	3	40.1	5	30.3						
3		4	32.8	2	41.6	3	36.9	1	54.5	1	48.8	1	52.1	3	36.8	1	43.7	2	45.2						
4		3	36.5	5	32.6	4	34.7	4	32.7	8	14.6	6	25.0	2	39.3	4	34.6	6	23.6						
5		7	19.7	4	37.8	5	28.0	5	27.3	4	31.7	5	29.2	4	35.0	5	23.5	3	34.8						
6		8	11.3	6	23.6	8	17.0	8	20.0	2	43.9	3	30.2	6	29.9	8	15.7	4	33.8						
7		5	21.5	9	15.9	7	18.9	9	12.7	12	0.0	10	7.3	5	30.8	6	17.1	11	8.0						
8		6	20.8	7	19.3	6	20.1	11	7.3	11	4.9	11	6.3	7	24.8	10	14.1	10	12.1						
9		10	10.6	8	18.5	9	14.4	6	23.6	5	24.4	7	24.0	8	23.1	6	17.1	7	21.5						
10		9	10.9	11	11.2	10	11.0	10	10.9	8	14.6	9	12.5	11	1.7	11	10.9	9	12.9						
11		11	5.8	10	12.4	11	8.9	6	23.6	6	22.0	8	22.9	12	0.9	9	14.7	8	17.2						
12		12	3.3	12	3.0	12	3.2	12	3.6	10	7.3	12	5.2	10	2.6	12	3.5	12	5.2						

（備考）複数回答である。

表11-2 大学生の出席率

出席状況	大 学				短 期 大 学				計									
	国公立		私 立		計		国公立		私 立		計							
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%						
全 員 3分の2 半 分 3分の1 その他 NA	7	23.3	14	18.7	21	20.0	4	40.0	7	50.0	11	45.8	11	27.5	21	23.6	32	24.8
	13	43.3	32	42.7	45	42.9	4	40.0	5	35.7	9	37.5	17	42.5	37	41.6	54	41.9
	5	16.7	11	14.7	16	15.2	2	20.0	0	0	2	8.3	7	17.5	11	12.4	18	14.0
	5	16.7	6	8.0	11	10.5	0	0	0	0	0	0	5	12.5	6	6.7	11	8.5
	0	0	8	10.7	8	7.6	0	0	2	14.3	2	8.3	0	0	10	11.2	10	7.8
	0	0	4	5.3	4	3.8	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4.5	4	3.1
計	30	100	75	100	105	100	10	100	14	100	24	100	40	100	89	100	129	100

・表11-1に見るように、約2割の者だけがこれ
をしない。勿論、他が一度にするわけではないが、
決して少ない数ではない。

表11-3 中・高生の出席率

出席状況	中学校		高等学校		計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
全員	51	82.3	40	83.3	91	82.7
9割以上	6	9.6	8	16.7	14	12.7
8割以上	1	1.6	0	0	1	0.9
7割以上	2	3.2	0	0	2	1.8
NA	2	3.2	0	0	2	1.8
計	62	100	48	100	110	100

* 大学教員の見るところ（表12-1，表12-2）

表12-1 大学生の遅刻

遅刻者	大 学						短 期 大 学						計					
	国公立			私 立			国公立			私 立			計			国公立		
	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%
	回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%	
非常に多い	0	0		0	0		0	0		0	0		0	0		0	0	
多い	1	3.3		5	6.7		2	20.0		1	7.1		3	12.5		3	7.5	
普通	3	10.0		17	22.7		2	20.0		7	50.0		9	37.5		5	12.5	
少ない	23	76.7		41	54.7		64	61.0		4	28.6		9	37.5		28	70.0	
いない	3	10.0		8	10.7		11	10.5		2	14.3		3	12.5		4	10.0	
NA	0	0		4	5.3		4	3.8		0	0		0	0		0	0	
計	30	100		75	100		105	100		14	100		24	100		40	100	
																89	100	
																129	100	

表12-2 大学生の途中退席

途中退席者	大 学						短 期 大 学						計					
	国公立			私 立			国公立			私 立			計			国公立		
	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%
	回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%	
非常に多い	0	0		0	0		0	0		0	0		0	0		0	0	
多い	0	0		0	0		1	10.0		0	0		1	4.2		1	2.5	
普通	0	0		2	2.7		0	0		0	0		0	0		0	0	
少ない	10	33.3		24	32.0		34	32.4		4	28.6		7	29.2		13	32.5	
いない	20	66.7		42	56.0		62	59.0		8	57.1		14	58.4		26	65.0	
NA	0	0		7	10.3		7	5.7		2	14.3		2	8.3		0	0	
計	30	100		75	100		105	100		14	100		24	100		40	100	
																89	100	
																129	100	

- 国立，そして大学の方が少なく，私立短大が最も多い。
- 「遅刻のない授業」は，全体で1割のみ。「非常に多い」はないが，「普通」を加えると，30%のクラスで普通に見られることになる。1講時の実数はどの位だろうか？
- 全体として極く少数だが，無いわけではなく，3分の1のクラスで見られる。

* 中・高教員の報告（表12-3，表12-4）

表12-3 中・高生の遅刻・早退

遅刻・早退者	中学校		高等学校		計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いない	20	32.3	11	22.9	31	28.2
少ない	33	53.2	33	68.8	66	60.0
普通	4	6.5	2	4.2	6	5.5
多い	3	4.8	1	2.1	4	3.6
非常に多い	0	0	1	2.1	1	0.9
NA	2	3.2	0	0	2	1.8
計	62	100	48	100	110	100

表12-4 中・高生の授業中の出入り

途中入出者	中学校		高等学校		計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いない	48	77.4	44	91.7	92	83.6
少ない	11	17.7	4	8.3	15	13.6
普通	2	3.2	0	0	2	1.8
多い	1	1.6	0	0	1	0.9
非常に多い	0	0	0	0	0	0
NA	0	0	0	0	0	0
計	62	100	48	100	110	100

- 大学に比べると少ないが，それでも，4～10%の学校で見られる。「無い」は3割程度である。勿論，途中の出入りは8割方無い。

c. 居眠り

* 大学生の場合

- 表11-1 で見た通り，非常に多く，50%近くに及ぶ。

* 大学教員の観察から（表13）

表13 受講中の居眠り

居眠り者	大 学						短 期 大 学						計						
	国公立			私 立			計			国公立			私 立			計			
	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	回答数		%	
	回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%		回答数	%		
午前	非常に多い	0	0	1	1.3	1	1.0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.1	1	0.8
	多い	2	6.7	1	1.3	3	2.9	0	0	1	7.1	1	4.2	2	5.0	2	2.2	4	3.1
	普通	2	6.7	9	12.0	11	10.5	3	30.0	3	21.4	6	25.0	5	12.5	12	13.5	17	13.2
	少ない	16	53.3	41	54.7	57	54.3	5	50.0	6	42.9	11	45.8	21	52.5	47	52.8	68	52.7
	いない	9	30.0	15	20.0	24	22.9	0	0	3	21.4	3	12.5	9	22.5	18	20.2	27	20.9
計	NA	1	3.3	8	10.7	9	8.6	2	20.0	1	7.1	3	12.5	3	7.5	9	10.1	12	9.3
	計	30	100	75	100	105	100	10	100	14	100	24	100	40	100	89	100	129	100
午後	非常に多い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	多い	4	13.3	1	1.3	5	4.8	0	0	4	28.6	4	16.7	4	10.0	5	5.6	9	7.0
	普通	1	3.3	7	9.3	8	7.6	3	30.0	1	7.1	4	16.7	4	10.0	8	9.0	12	9.3
	少ない	12	40.0	39	52.0	51	48.6	4	40.0	6	42.9	10	41.7	16	40.0	45	50.6	61	47.3
	いない	5	16.7	9	12.0	14	13.3	1	10.0	1	7.1	2	8.3	6	15.0	10	11.2	16	12.4
計	NA	8	26.7	19	25.3	27	25.7	2	20.0	2	14.3	4	16.7	10	25.0	21	23.6	31	24.0
	計	30	100	75	100	105	100	10	100	14	100	24	100	40	100	89	100	129	100

* 大学教員の判断（表15-3）

表14-2 中・高生の授業中の内職

内職者	中 学 校		高等学校		計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いない	27	43.5	13	27.1	40	36.4
少ない	33	53.2	29	60.4	62	56.4
普 通	1	1.6	5	10.4	6	5.5
多 い	1	1.6	0	0	1	0.9
非常に多い	0	0	0	0	0	0
NA	0	0	1	2.1	1	0.9
計	62	100	48	100	110	100

表15-2 中・高生の授業中の私語

私語する者	中 学 校		高等学校		計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いない	6	9.7	11	22.9	17	15.5
少ない	42	67.7	31	64.6	73	66.4
普 通	8	12.9	2	4.2	10	9.1
多 い	5	8.1	3	6.3	8	7.3
非常に多い	0	0	0	0	0	0
NA	1	1.6	1	2.1	2	1.8
計	62	100	48	100	110	100

表15-1 受講中の私語

私語する者	大 学						短 期 大 学						計					
	国公立		私 立		計		国公立		私 立		計		国公立		私 立		全	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
非常に多い	0	0	0	0	0	0	0	0	2	14.3	2	8.3	0	0	2	2.2	2	1.6
多 い	1	3.3	15	20.0	16	15.2	1	10.0	5	35.7	6	25.0	2	5.0	20	22.5	22	17.1
普 通	5	16.7	15	20.0	20	19.0	4	40.0	2	14.3	6	25.0	9	22.5	17	19.1	26	20.2
少ない	17	56.7	29	38.7	46	43.8	4	40.0	5	35.7	9	37.5	21	52.5	34	38.2	55	42.6
いない	7	23.3	11	14.7	18	17.1	1	10.0	0	0	1	4.2	8	20.0	11	12.4	19	14.7
NA	0	0	5	6.7	5	4.8	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5.6	5	4.7
計	30	100	75	100	105	100	10	100	14	100	24	100	40	100	89	100	129	100

- 授業規模として「大教室」「多人数」が50%以上、つまり、2人に1人の教員が問題視している。特に、私立の短大では、64%に及ぶ。
- 講義内容では「内容なし」「難しい」が国立大学でそれ程問題にされていないのに対し、私立はほぼ2倍となっている。
- 講義方法としては、内容も含む「単調」が、そして「叱らない」「声が通らない」「質問しない」「話術下手」といった技術的面が上位に上っている。特に、国公立と私立の差は大きい。「声が通らない」は、表15-4でも上位にあることを注目する必要がある。
- 「女性講師」や「非常勤講師」又「教師の人柄」は私語に余り関係していない。但し、私立短大に関しては、「非常勤講師」「温和な教師」「評価の甘い教師」の場合、私語が多い。
- 「男子学生の多いクラス」に比べて「女子学生の多いクラス」が私語が多いとされている。
- 一方、私語の少ない授業を見てみよう。表15-3で、「資格取得関係講義」「必修科目」が注目される。「余談の多い講義」は、飽きさせないからか、それとも出席しないからか？
- 「出席を取らない」「提出物やテストの少ない」「試験や評価の甘い」「教科書使用」の授業は、始めから出席していない為私語が少ないとも考えられる。

* 大学生の挙げる私語の多い授業（表15-4）

- 全体として「私語はない」は、B大男子を除いて微細である。
- 「大教室」を問題とする声は、先に見た教師の場合と同一で、すべてで1位を占める。
- 「内容のない」「整理されていない」「難しすぎる」「有用性のない」講義が上位にある。
- 「余談の多い講義」「必修科目」「教科書使用の講義」は、教員の場合と同一で私語が少ない。
- A大学では「出席を取らない」講義で、私語が20%に及び、他大学と比べて多い。全体としては「出席を取る」「取らない」は、余り差を生んでいない。
- 「友人と聴く」講義で私語が多く、特に女子に目立つ。

以上、紙数の都合で、今回は、調査に見る実態のみを報告した。次回はアンケート調査の他項目で把握した資料を含めて、要因を分析し、「5 考察(2)」とする。又、更に「5 考察(3)」として、学習意欲喚起の方策を検討しようと思う。なお、アンケート用紙は次回に採録する予定である。

（平成元年9月20日）

表15-3 受講中私語の多い授業（大学教員の判断）

順位	選 択 肢	大 学						短 期 大 学						計					
		国公立		私 立		計		国公立		私 立		計		国公立		私 立		全	
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1	大教室の授業	16	53.3	39	52.0	55	52.4	4	40.0	9	64.3	13	54.2	20	50.0	48	53.9	68	52.7
2	多人数の受講生	12	40.0	41	54.7	53	50.5	3	30.0	9	64.3	12	50.0	15	37.5	50	56.2	65	50.4
3	単調な講義	5	16.7	22	29.3	27	25.7	2	20.0	7	50.0	9	37.5	7	17.5	29	32.6	36	27.9
4	注意や叱責をしない先生	3	10.0	22	29.3	25	23.8	3	30.0	6	42.9	9	37.5	6	15.0	28	31.5	34	26.4
5	声の通らない講義	7	23.3	16	21.3	23	21.9	1	10.0	4	28.6	5	20.8	8	20.0	20	22.5	28	21.7
6	質問がなく思考を触発しない講義	2	6.7	17	22.7	19	18.1	1	10.0	6	42.9	7	29.2	3	7.5	23	25.8	26	20.2
7	内容のない講義	3	10.0	15	20.0	18	17.1	2	20.0	3	21.4	5	20.8	5	12.5	18	20.2	23	17.8
8	難しい講義	3	10.0	14	18.7	17	16.2	0	0	4	28.6	4	16.7	3	7.5	18	20.2	21	16.3
9	話術の下手な講義	4	13.3	11	14.7	15	14.3	1	10.0	4	28.6	5	20.8	5	12.5	15	16.9	20	15.5
10	マイク講義	3	10.0	13	17.3	16	15.2	1	10.0	0	0	1	4.2	4	10.0	13	14.6	17	13.2
11	非常勤の先生	2	6.7	7	9.3	9	8.6	1	10.0	5	35.7	6	25.0	3	7.5	12	13.5	15	11.6
12	散漫な講義	1	3.3	10	13.3	11	10.5	2	20.0	2	14.3	4	16.7	3	7.5	12	13.5	15	11.6
13	实际的有用性のない講義	2	6.7	7	9.3	9	8.6	1	10.0	4	28.6	5	20.8	3	7.5	11	12.4	14	10.9
14	試験や評価の甘い授業	2	6.7	9	12.0	11	10.5	0	0	3	21.4	3	12.5	2	5.0	12	13.5	14	10.9
15	女子学生の多い授業	0	0	8	10.7	8	7.6	0	0	5	35.7	5	20.8	0	0	13	14.6	13	10.1
16	独り善がりの講義	1	3.3	11	14.7	12	11.4	0	0	1	7.1	1	4.2	1	2.5	12	13.5	13	10.1
17	座席指定のない授業	0	0	9	12.0	9	8.6	0	0	2	14.3	2	8.3	0	0	11	12.4	11	8.5
18	黒板を余り使わない講義	2	6.7	8	10.7	10	9.5	0	0	1	7.1	1	4.2	3	7.5	9	10.1	11	8.5
19	尊敬できない先生	1	3.3	9	12.0	10	9.5	1	10.0	0	0	1	4.2	2	5.0	9	10.1	11	8.5
20	性格の温和な先生	1	3.3	5	6.7	6	5.7	1	10.0	3	21.4	4	16.7	2	5.0	8	9.0	10	7.8
21	ぞんざいな先生	1	3.3	6	8.0	7	7.6	0	0	1	7.1	1	4.2	1	2.5	7	7.9	8	6.2
22	必修科目	1	3.3	5	6.7	6	5.7	0	0	1	7.1	1	4.2	1	2.5	6	6.7	7	5.4
23	レポート提出や小テストを余りしない授業	1	3.3	3	4.0	4	3.8	1	10.0	2	14.3	3	12.5	2	5.0	5	5.6	7	5.4
24	休日後の授業	0	0	3	4.0	3	2.9	0	0	3	21.4	3	12.5	0	0	6	6.7	6	4.7
25	教科書使用の講義	1	3.3	4	5.3	5	4.8	1	10.0	0	0	1	4.2	2	5.0	4	4.5	6	4.7
26	資格など取得のための講義	0	0	3	4.0	3	2.9	1	10.0	0	0	1	4.2	1	2.5	3	3.4	4	3.1
27	余談の多い講義	0	0	3	4.0	3	2.9	0	0	1	7.1	1	4.2	0	0	4	4.5	4	3.1
28	出席を取らない授業	0	0	3	4.0	3	2.9	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3.4	3	2.3
29	男子学生の多い授業	0	0	2	2.7	2	1.9	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2.2	2	1.6
30	女性の先生	0	0	0	0	0	0	1	10.0	0	0	1	4.2	1	2.5	0	0	1	0.8
31	その他	3	10.0	5	6.7	8	7.6	1	10.0	0	0	1	4.2	4	10.0	5	5.6	9	7.0

現今大学生の学習意欲に関する一考察（1）

表15-4 受講中私語の多い授業（学生の判断）

順位	選 択 肢	A 大 学						B 大 学						C短期大学		A B 大 学			
		男 子		女 子		計		男 子		女 子		計		女 子		男 子		女 子	
		順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%
1	大教室の授業	1	66.4	1	74.2	1	70.0	1	81.8	1	65.9	1	75.0	2	46.2	1	74.1	1	70.1
2	内容の感じられない講義	2	39.4	2	54.5	2	46.4	2	49.0	3	51.2	2	50.0	1	53.8	2	47.0	2	52.9
3	声の通らない講義	3	36.5	3	48.5	3	42.0	3	40.0	2	53.7	3	45.8	6	32.5	3	38.3	3	51.1
4	仲の良い友人と聴く講義	4	35.4	4	42.9	4	38.9	5	32.7	4	39.0	4	35.4	3	41.9	4	34.1	4	41.0
5	整理されていない講義	7	21.5	5	28.8	6	24.9	4	36.4	5	34.1	4	35.4	5	35.9	5	29.0	5	31.5
6	難しすぎる講義	5	27.4	6	24.5	5	26.0	8	23.6	6	22.0	6	22.9	4	38.5	6	25.5	6	23.3
7	内容が将来役に立つとは思われない講義	6	22.3	7	19.7	7	21.1	6	25.5	9	9.8	7	18.8	7	23.9	7	23.9	7	14.8
8	なじめない先生	10	18.2	9	17.6	9	17.9	6	25.5	9	9.8	7	18.8	9	14.5	8	21.9	9	13.7
9	黒板を余り使わない講義	12	13.5	10	16.7	11	15.0	9	21.8	8	12.2	9	17.7	8	18.8	9	17.7	8	14.5
10	出席を取らない講義	8	20.4	8	18.5	8	19.5	14	5.5	13	7.3	13	6.2	13	6.0	12	13.0	11	12.9
11	おとなしい先生	9	20.1	11	12.0	10	16.4	12	9.1	9	9.8	12	9.4	11	9.4	11	14.6	12	10.9
12	出席を取る授業	11	13.9	12	11.6	12	12.8	10	16.4	7	14.6	10	15.6	19	0.8	10	15.2	10	13.1
13	試験や評価が易しい授業	13	10.9	13	10.7	13	10.8	13	7.3	16	2.4	14	5.2	10	10.3	14	9.1	14	6.6
14	マイク講義	14	8.0	14	7.7	14	7.9	11	12.7	9	9.8	11	11.5	12	7.7	13	10.4	13	8.8
15	資格や免許に無関係の講義	15	6.9	17	4.7	15	5.9	17	1.8	16	2.4	17	2.1	15	5.1	15	4.4	17	3.6
16	午後の講義	16	5.1	15	6.0	16	5.5	15	3.6	18	0	17	2.1	13	6.0	15	4.4	18	3.0
17	余談の多い講義	17	4.7	16	5.2	17	4.9	15	3.6	15	4.9	15	4.2	17	2.6	17	4.2	16	5.1
18	必修科目	18	4.4	18	3.9	18	4.1	17	1.8	13	7.3	15	4.2	20	0	18	3.1	15	5.6
19	非常勤講師	19	2.6	19	1.3	19	2.0	20	0	18	0	20	0	11	9.4	20	1.3	19	0.7
20	教科書使用の講義	20	1.5	19	1.3	20	1.4	17	1.8	18	0	19	1.0	17	2.6	19	1.7	19	0.7
※	私語はない	13人	4.7	3人	1.3	16人	3.2	16人	10.9	1人	2.4	7人	7.3	2人	1.7	19人	5.8	4人	1.5

註

- 1) 教養課程担当教員126名（常勤83名，非常勤43名）
- 2) 文部省『学制百年史（資料編）』帝国地方行政学会，昭和47年，p.256～p.257
- 3) 暉峻康隆「女子学生世にはばかり」（『婦人公論』1962年3月），池田弥三郎「大学女禍論」（『婦人公論』1962年4月）
- 4) 昭和29年…進学率10%（含む短期大学），昭和41年…15%，昭和43年…20%，M. Trow の『高学歴社会』によれば，15%以下はエリート型，15%以上はマス型とされる。
なお，私立大学の入学定員超過状況 昭和50年…1.79倍，昭和53年…1.52倍
- 5) 出生数 昭和42年…194万人，昭和46年…200万人，昭和48年…209万人
- 6) 7，8月号。因みに，同教授は本年度文化勲章を受賞した。
- 7) 例，岩崎重剛，石桁正士「学習意欲としてのやる気の調査とその処理」（『大阪電気通信大学研究論集』15～19），静岡大学法経学会調査委員会「学生の勉学に関する意識実態調査」（『静岡大学人文学論集』28），「大学生の意欲減退の実態」（『厚生補導』101）
- 8) 例，ピアド，ハートレイ『大学の教授・学習法』，ブライ『大学の講義法』，ロンドン大学教授法研究部編『大学教授法入門』，マッキーチ『大学教授法の実際』（以上，共に玉川大学出版部刊）
- 9) 玉川大学出版部，昭和63年，p.144～p.162
- 10) 例，松村源太郎『大学はこれでいいのか』日経新聞，昭和53年。天城勲編『新しい大学観の創造』サイマル出版，昭和53年。日本科学者会議教育問題委員会『大学教師の仕事』水曜社，昭和58年
- 11) 上記 M. Trow の説（1978年）で当該年齢の50%以上が高等教育を受けるに至った大学。
- 12) この実施に当っては，仏教大学の学会助成金の補助を受けた。ここに謝意を表わしたい。
- 13) 日本リクルート「進学動機調査」（昭和59年），（天野正子編『女子高等教育の座標』垣内出版，昭和61年）p.129